



絵と文・佐藤勝昭



51

麻生区  
文化協  
会報

浄土宗麻生山

浄慶寺

柿生駅から南に五百メートルほど行った緑豊かな地に、麻生山浄慶寺というお寺があります。この寺は、四百年ほど前、領主三井左衛門尉が小牧長久手の戦いで戦没した父寿光院の追福を弔うために建立したと伝えられています。本堂は関東大震災で破損し、昭和八年に再建されました。

境内から本堂の裏の斜面にある遊歩道に沿って千株を越えるあじさいが植えられ、「あじさい寺」の愛称で知られ、平成七年神奈川県「花の名所百選」に指定されています。

また、境内の沿道に沿って、将棋を指したり、カメラや携帯電話を持ったり、パソコンに向かって思案顔だったりの羅漢様の石像が多数置かれ、参拝客を楽しませていきます。

隣接する緑豊かな山林は、柿生の里特別緑地保全地区に指定され、美しい景観をなしています。



## 「芸術・文化のまち麻生」の さらなる発展に向けて

麻生区長 瀧 峠 雅 介



本年四月一日付けで麻生区長に  
着任いたしました。どうぞよろし  
くお願いします。

麻生区は、多摩丘陵の豊かな自  
然や歴史的な文化財・史跡、芸術  
文化の拠点施設などに恵まれ、文  
化、芸術の創造的な活動にふさわ  
しいまちです。

また、幅広い芸術文化の分野で  
活躍されている方が多く在住され  
ており、麻生区における文化の振  
興や向上にも大きく貢献してい  
ただいているところでもございます。

現在、麻生区の人口は十七万人  
を超えております。麻生区が多摩  
区から分区分した一九八二年の人口  
は約九万六千人でしたから、この  
三十年程でおよそ一・八倍、七万  
四千人程度の人口が増加していま  
す。このことは、麻生のまちの活  
力やエネルギーを生み出す大きな  
要因ともなっているわけですが、  
一方では、地域の環境も大きく変  
化し、とすれば人と人とのつな  
がりや薄れがちな状況にあるとも  
言えるのではないかと思います。

こうした中、麻生区では、麻生  
区文化協会の皆様をはじめとした  
多くの方々の手によって、区内の  
伝統・伝承文化を広く紹介し、そ  
の伝承やふるさと意識の醸成など  
に取り組む「ふるさとあさお再発  
見事業」が従来より実施されてい  
ます。毎年お正月には、区役所前  
広場にて「あさお古風七草粥の会」  
も開催され、季節の風物詩として  
すっかり定着していると伺ってい

ます。この会を通じ、多くの方々  
が日本の伝統的な食文化にふれ、  
そのことが古来の風習や伝統文化  
の保存・継承にもつながっている  
ものと思います。

また、従前からの麻生市民館や  
新百合21ホールなどに加えて、二  
〇〇七年には昭和音楽大学の移転  
開校や川崎市アートセンターの開  
館、今年四月には日本映画大学の開  
学など、区内には新たな芸術文  
化拠点の立地も進んでいます。こ  
のような拠点を舞台に、麻生区文  
化祭、麻生音楽祭、KAWASAKI  
KIしんゆり映画祭、アルテリッ  
カしんゆり、あさお芸術のまちコ  
ンサート、k i r a r a a @アート  
しんゆりなどの多彩な事業やイベ  
ントが展開されています。

こうした多様な取り組みや芸術  
文化関連事業を媒介に、麻生区に  
集う皆さんが、この芸術文化の香  
る麻生の地でさまざまな体験や交  
流を積み重ね、さらにそれぞれの  
分野で個性を発揮しながらご活躍  
いただければ大変素晴らしいこと  
だと思います。また「芸術・文化  
のまち麻生」がより多くの方々に  
知られるとともに、麻生ブランド  
として広まることにより、新たな

人材や情報や絆がさらに麻生区に  
集まり、生まれてくるといった好  
循環が形成されることをぜひ期待  
したいと思います。

古くからの伝統文化と新しい文  
化のコラボレーションや芸術文化  
活動のさらなる発展は、地域社会  
の繋がりがより強いものとするこ  
とでしようし、うるおいや活力の  
ある地域社会の実現に大きく寄与  
するものだと思います。このよう  
な取り組みを通じて、「麻生区に住  
んでよかった、訪れてよかった」  
と実感できる魅力あるまちづくり  
をさらに進めていくことは、麻生  
区政に携わる者として大きく目標  
とするところです。

本年三月に策定した「川崎再生  
フロンティアプラン第三期実行計  
画（二〇一〇―二〇一三年）」の麻  
生区計画においても、重点項目の  
一つとして「芸術・文化のまちづ  
くりの推進」を位置付けさせてい  
ただきました。「芸術・文化のまち  
麻生」のさらなる発展に向けまし  
ては、区役所としてももちろん出  
来る限り取り組んでまいります。が、  
麻生区文化協会のますますのご活  
躍とご尽力に心よりご期待申し上  
げるところでございます。

# 天文と私

## 箕輪敏行

### 流星の二点観測

私の少年の頃の麻生の空はずみ渡っていて、母の背にもたれ乍ら星にひかれていったのだろう。



西生田小学校より、箕輪観測所に移設された流星写真機 ●1955年11月  
(左より、香西・箕輪・富田・内田の諸先生)

はなしはとぶが、一九四八年三鷹の天文台から古畑、下保両先生がみえ、細山で黄道光の試験観測をやりたいたいわれた。細山の高地(高度百二十メートルの多摩美の丘)に案内し試験観測を行った。この観測は一年で終わった。

翌年天文台の富田、広瀬の両先生がみえ、流れ星の二点観測をやりたいといわれた。流れ星を二か所で同時に観測するという。当時の二点観測は世界でも米、英、カナダぐらいでめざらしかった。

二箇所をどこにきめるか、私も大変乗り気になり、一点は三鷹の国立天文台に、もう一点は細山

にした。細山は私の在任地である西生田小学校の校庭を選んだ。

富田先生と私は一睡もせず連夜観測にはげんだ。富田先生は観測が終るとその朝三鷹まで帰るという難事であった。

この頃、毎夜わが家にとまり込みで観測をしていた川崎中部の小平桂一君と言う小学生がいた。この少年は後に国立天文台長となり、例のスパル望遠鏡をハワイに作り、現在はドイツに留学している。

### 川崎天文同好会

星とのかかわりをのべるといくらでもすばらしい話がある。二点観測を契機に、川崎天文同好会が結成された。この会は会長を置かず、皆で協議をしてやるという同人制の運営であり、自らを総会屋と名乗ったほどの活躍をしてきた。下段にその足跡を記してみた。

### ～川崎天文同好会の足跡～

- 各種部門別集会(変光星、流星など)
- 日本星空を守る会事務局(全国一夜消燈)
- 金星太陽面経過観測記念碑設立(横浜野毛山)
- チロ(Tro)望遠鏡によるハレー彗星観測会(3,000人希望)
- 市役所前、川崎駅前、授産学園200回以上に及ぶ市民天体観望会
- 海外日食、ハレー彗星観望会
- 天文ハイキング、天文例会
- 日本アマチュア天文研究発表会(川崎で5回)
- アマ天文史への協力
- 機関紙「星」342号(2011.9現在)

天体研究家で各種の本を記している藤井旭などもわが本来の同人である。星とのかかわりの友人は多く、仲のいいのも一つの特徴である。

あの名高い富田先生もすでになくなられた。そのダンボール箱百五十個にも及ぶ遺品は、現在青少年科学館にあり、後日記念館を作る予定である。

# 静謐な詩人 山室 静

## 「ムーミン」シリーズの翻訳など

畔田 二郎

### 幼少時代

山室静は明治三十九年十二月に父茂次郎、母いまの第五子として生れる。祖父直高は長く伏見奉行所に勤め、幕末には半蔵門を守っていて、徳川慶喜をひそかに脱出させたことで謹慎を命ぜられ、それを機に藩地岩村田（現佐久市）に移った。父茂次郎は青年時代から漢詩人として知られ、藤城と号し、著書に「鶏肋詩存」三巻がある。母は我が国最初の洋式牧場として知られる神津牧場発案者の一人で、ハイカラで聞こえた信州佐久の神津慎吉の次女。少女時代は岩村田町の英語塾に馬車で通い、草創期の長野県尋常師範女子部へ進んで、明治二十七年に卒業。小諸・岩村田の小学校に勤め、小学校時代の恩師である父と結婚して各地の小学校を転動した。静は七人兄弟の四男として生まれた。

父茂次郎は静が小学校一年生の時に急逝、七人の子供をかかえた母親は、やむをえず静を茂次郎の妹の嫁ぎ先で医院を営む金澤家に預けた。静は養家の伯母が武家氣質の厳しい人だったため、肩身の狭い思いを噛みしめつつ万事に控えめな生き方を身につける。

静は、そこで六年を過ごす、長野県立野沢中学校（現野沢北高校）二年進級時に金澤氏に「医者になるなら続けて学資を出す」との養家の提案を断ったため養家を離れて家族の許へ帰る。中学へは片道一〇キロを徒歩で通う。

### 文学への目覚

中学四年生頃から、それまで得意だった理科や地理への興味を喪失して、文学書を乱読、次第に文学少年となっていく。さらに五年生に進級後、時の国語教師の和合氏の影響で、万葉・西行・芭

蕉・良寛等の日本の古典にしみ、島崎藤村・西條八十・北原白秋等に傾倒し、や

がて、室生犀星・山村暮鳥等に共感して、詩を書き始める。この時期に山室静の文学者としての方向性が決定されたと思う。

近代文学の創刊から終刊まで

中学卒業後、小学校の代用教員、岩波書店編集部・プロレタリア科学研究所・アメリカ人の貿易商社等に勤務するなどして生計を立てるかたわら、各種雑誌に詩とエッセイを発

表し、同人誌を主宰するなど文学への傾斜を深めていった。その時期に、のちに近代文学の創刊にたずさわる、本多秋五・平野謙・佐々木基一・荒正人・埴谷雄高・小田切秀雄等との親交をもつようになる。三十二歳にして東北帝国大学へ入学、阿部次郎教授の指導を受ける。戦後間もない昭和二十



昭和30年 近代文学同人（左から2番目が山室静氏）

一年、前記六名と語らって、同人誌「近代文学」を創刊、昭和三十九年通巻第一八五号を以て終刊するまで戦後の日本文学界を牽引して来た。

### 川崎市麻生区への転居

昭和二十一年、静は、新日本再建のための勤勞奉公の念と創意工夫とに富む真摯篤実なる青年を養

成せん事を期し、井出太郎等を発起人とし、小諸市に、浅間国民高等学校（高原学舎）を設立し、教育に当たったが、六三制実施と、おりからのインフレにより、資金的にも行きづまり、一年あまりで解散となった。

昭和二十四年四月、高原学舎で教師をしていた山崎氏の紹介で、麻生区片平に小諸市から転居して



きた。それから逝去する平成十二年まで丁度五十年間、片平を拠点に文学活動を続けて来た。

### 山室静の文学活動

山室は、北欧文学者・児童文学者・詩人・文芸評論家・日本女子大学教授などの顔をもっていたが、詩人と呼ばれることを一番の誉れにしていた。山室静の文学活動はあ

まりに多岐にわたるため、すべてを紹介することは出来ない。一部のみを紹介する。シュヴァイツァー「文学の衰退と再建」、ヤコブセン「死と愛」、イブセン「人形の家」、スウェンソン「ノンニの冒険」と「グリム童話集」訳出。さらに「タゴールの二つの詩集について」（近代文学）、聖書物語を書きおろした。フィンランドで買い求めてきた

トーベ・ヤンソンのムーミンシリーズが面白く、ヤンソン女史に訳出の同意を求めて出した手紙に快諾の返事が届く。合間をみては「たのしいムーミン一家」のシリーズを訳出。

「島崎藤村の人と文学」・「堀辰雄の人と文学」・山室静著作集：第一回平林たい子文学賞受賞・「アンデルセンの生涯」：毎日出版文化賞受賞。「十六歳の兵器工場」：毎日出版文化賞受賞。

「北欧の神々と妖精たち」・「世界のシンデレラ物語」・キャンベル「神の仮面」訳出、等々。その一方佐久文化会議を、昭和五十七年に創設。平成二十年、第二十五回をもって終結するまで、山室静佐久文化賞を授与するなどして、郷土佐久の文化向上に寄与した。

麻生区文化協会には草創期から参加、平成五年には麻生区文化協会の主催で、同年に受賞した川崎市文化賞を祝う会が開かれた。同年五月教え子たちの呼びかけで、八十八歳になることから、「山室夫妻を祝う会」が開かれ車椅子で出席、参加者は百五十名を越えた。

### 身の丈を越す書を著す

平成十一年九月はじめ、突然信州へ行きたいと言い出し聞き入れず、家族も折れて長男の車で少年時代の六年間を養われた伯母の婚家にあたる金澤病院に入院した。東京からの教え子たちの「先生、私をわかって？」との問いに、咄嗟の反応は衰えても、最後まで意識は確かだった。しかし入院以来一九八日、平成十二年三月二十五日午前八時十九分、家族全員に見守られての臨終だった。

享年九十五歳

法名大智院文督齋静徳胎居士  
後日行なわれた山室静を偲ぶ会で挨拶に立った友人の本多秋五氏は、「山室静さんは万巻の書に親しみ、身の丈を越す書を著しながら全く偉ぶった所の無い、真の文学者であつた。」と人柄をたたえた。

「アルテリツカしんゆり美術展」

今回の美術展では、劇団民藝の俳優さんからも絵画を出品していただきましたので、民藝絵画部を代表して田口精一さんに、  
 展覧会開催にあたりお話をさせていただきました。

劇団民藝 田口精一

ギャラリートーク「役者が絵をかくとき」

民藝の田口でございます。今日は、役者がどうして絵を描くのかということについて少しお話をさせていただくことになりました。よろしく願い致します。

民藝が黒川に来て三十年近くなるわけですが、当時、宇野重吉や滝沢修は「劇団は常に地元と交流を深めていくことが大切」と常々



ギャラリートーク 田口氏

言っております。私が民藝に入ったその頃、劇団をあげて絵画に取り組むことになりました。滝沢は「演劇は総合芸術であるから、音楽も美術も全部知っていなければいけない。勿論文学もそうだよ」と言っていました。俳優さんが絵を描くのは当たり前のような雰囲気でした。「俳優にとって絵を描くということとは観察の眼を養うことになるのだから、日常から人を観察していなければいけない。」ということが滝沢修の教えでもありました。宇野重吉という方も絵を描きました。あの方は文章から人物を起こしていくという方で、文章の読破力に大変優れていて、俳優の皆さんには小説を読めということをよく言っていました。

滝沢修は常に画集を持っていて、ロシアの芝居だったらロシアの、シェークスピアの芝居だったらシ

エークスピアに関わる美術の絵を見なさいと言っておられた。そして、その絵から人物を想像し、観察の中から、表情や動きのポーズを捉え、貴族の生活、百姓の生活を読みとることが大切である。ということをよく言われました。滝沢先生のことので印象的なことは、「ゴッホ」というお芝居をやることになって、自分はまだ新米で受付係をやっていました。帰りに前年できたブリジストン美術館に初めて行ったのですが、絵の前で私の後ろに誰か居る気配を感じたので邪魔してはいけないと思つて横に動いてその方の顔を見たら、それが滝沢先生でした。思わず最敬礼してしまつたら「君はどうだ、君、今年入つた人、どうして君ここにいるの」なんて話になりました。「受付をやつた後、まだ絵を見てないので、ここに寄つたんです」と言つたら「君は絵が好きなんだ」、「そうです」と答えると「うれしいね、君、今日ごちそうするよ」なんて言われたことがあります。

話は変わりますが、私が美校を受けると言つたときは、親が渋い顔をしまして「お前、ルンペン絵

描きになるのか」親としては一生食えないと思つていたんでしようね。自分が絵を勉強したいと思つたのは、戦争が終わつて台湾から帰つてきた先生が「これからは自由になつたのだから自分の生きる道を自分で選びなさい。好きな仕事を見つけてなさい、好きな仕事をするためにどこの大学に進むかを考えなさい。」というようなことを言われた。そして、その先生自身が絵を描きたくて絵描きになつた。その先生が、昼飯を抜いて、それで絵の具を買つて絵を描いていました。それに感銘を受けたことも美校を受けるきっかけの一つになりました。民藝というのは旅に出るときも、みんな油絵の具を持つて出かけるというようなそんな劇団でした。今、若い人達にそれを言つと、中には、もう全然別の世界だという風に思っている人もいます。私達が先輩から受け継いできたものを、どうしたら若い人達に伝えていけるのかということがとても心配ですが、人の心を打つ作品をつくること、「人間って素敵よね」っていう人達を育てていくことが私たちの使命だと思つていきます。

(文責 岩田 輝夫)

# ”幕が開くまで”

あさお洋舞ぐるーぷ 伊藤 胡桃

あさお洋舞ぐるーぷは四月の総会において、麻生区文化協会より誉れある「文化振興賞」を受賞いたしました。一同、賞の重みを感じると共に深く感謝申し上げます。

私たちの創立は、文化協会と時期を同じく一九八五年の第一回文化祭です。当時を思い返すと、ピカピカの市民館大ホール、全てが「始めの一步」という感じでした。

今年はその文化祭も二十七回目を迎えます。四団体でスタートした麻生区文化協会洋舞は、入会や退会を経て、現在 あさお洋舞ぐるーぷ と名称を変え、クラシックバレエとモダンバレエ七団体で構成されています。その間各スタジオから、プロダンサー・舞台人等数多く輩出し、現在活躍しています。

文化祭をはじめ協会の十周年・二十周年の記念行事、又、かわさき市民芸術祭等にぐるーぷ合同の作品を発表してまいりましたが、昨春三月、麻生市民館で行われた第二十六回かわさき市民芸術祭(実

行委員長菊池・副委員長伊藤)に「パキータ」を上演いたしました。参加準備は、半年ほど前の十月作品決めから始まり、各スタジオから出演者を募り、役決めのおーディションを行い、小学生から大学生まで三十五名(他に客演男性二名)が決まりました。ただちに振付に入り、十一月から二月まで日曜・祭日・平日をフルに使い、本番を迎えるまでに稽古の数はなんと二十五回にものほりました。そ



れぞれ違う教室からの集まりの場合、揃えるという事が難題になりますが、良い作品にしたいという思いが一つになり今思い返しても、なかなか見られない熱い気持ちと真摯さがありました。稽古が進み、レンタルの衣装も到着、いよいよ本番を迎えます。リハーサルを見て「これでよし！」

当日、失敗して泣くような事はありませんようにと、ハラハラ見守るなか芸術祭の最後を飾った「パキータ」は全員が見事に踊り、達成感のある確かな成果を見せました。あふれる笑顔と調和のとれた舞台は、観客の皆さんの心にも届く作品となりました。また思いがけず、阿部川崎市長のご臨席をいただいた事により、一層重みのある上演結果となりました。

麻生区ならではの、合同作品が実現できるのは、あさお洋舞ぐるーぷならではのと言えます。指導者それぞれが、力を合わせ、広い心で若い芽を育て、お互いを認め合い、向上していけるのが特徴です。これからもそれを失わず進んでまいりたいと思います。洋舞ぐるーぷの活動は文化協会に支えられて継続してまいりました。今後とも



よろしくお願い申し上げます。また来春二月二十六日(日)、川崎教育文化会館で行われる市民芸術祭には、麻生区はモダンバレエ作品で参加いたします。これも麻生区文化協会が誇れる十分見応えのあるものになることでしょう。

※あさお洋舞ぐるーぷ所属団体・井上恵美子モダンバレエスタジオ・菊池バレエ研究所・胡桃(くるみ)バレエスタジオ・田畑ミュージックカルチャースクール・バレエ科・バレエスタジオ・えるどえる・MIYA BALLET COMPANY・吉原バレエ学園

## 会員の活躍

### 川崎市美術展

#### 特選「森の帳」

松田 洋子

日々生きているなかで、自分に向かって「ひかり」を放つものが作品になっていきます。目に見えるものに限らず、自分の感覚に鋭く反応したものが「ひかり」です。平面的な装飾文様を使いながら、一つの作品として説得力のあるものに作り上げてゆく。絵画という二次元の世界のなかで、二次元でも三次元でもなく、二・五次元の世界を創作しているのかもしれない。難しいけれど、それが私の「のぞみ」です。



油彩「森の帳」

「森」は、第二の海です。私にとって、生と死を考えるための出発

点です。今年の三月十一日に起きた東日本大震災以来、「森」は人間の帰るべき場所だと強く感じています。「森」に入れば、出会いがあります。発見があります。何かを選択せねばならないことも起こります。「森の帳」に描いたものは、死者と精霊と、そこに踏み込んだ人間の切り取られた風景です。

\*詩を書けば絵だという\*絵を描けば物語だという\*物語を書けばきみだという\*森に入れば大小無数の叫び声をする\*「こだま」でしょうか? いいえ、誰でも\*

#### 本殿と

#### 天井画の再建

宮司 志村 幸男

当神社は「柿生の金比羅様」と親しまれ、御山に鎮座する本殿と、本殿下の儀式殿にて参拝者をお迎えしております。このたびの本殿再建は、平成十九年六月二十六日の放火で焼失したことの御造営です。

本殿は、蔵造りで内陣の社まで火が入らず、ご神体は守られました。しかし本殿と併設する拝殿は全焼。その天井の、江戸時代の文



拝殿の天井画

人画家渡辺華山が描いたと伝えられる六十三枚の絵も焼失してしまいました。

渡辺華山との由縁は、私どもの先祖文之丞の名が華山の日記全案堂日録に記載され、華山が神社に足を運んだことが明記されています。このような貴重な歴史を失ったことは誠に残念でなりません。

神社の再建は四年の歳月が掛かりましたが、平成二十三年六月二十六日に竣工し、天井画も微力ではありますが宮司自ら筆を執り納めることができました。

関係各位のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

## 編集後記

▼震災から半年、復興にむけての遅々とした取り組みが歯がゆい。しかし、がれきの中で、人と人が織り成す助け合いの温かいドラマが胸を打つ。自然の力の前に人間は無力だが、強い絆を信じたい。▼からむしは、野山に自生し、その繊細の縦糸と横糸が織り成す生地は、丈夫で、重宝されてきた。▼広報「からむし」も縦糸になる人、横糸になる人が互いに相手を尊重しつつ強い絆でドラマを紡ぎながら企画し、地域の文化・芸術の発展に尽力された人々について取材・編集されて発行の運びとなった。(小田島記)

関森 田鶴子・岩田 輝夫・畔田 二郎  
千坂 隆男・橋本 周・佐藤 勝昭  
小田 島寛

麻生区文化協会会報

からむし 第五十一号

平成二十三年九月三十日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原 敬子

編集 麻生区文化協会

広報部

川崎市麻生区万福寺一―五―二

麻生文化センター内

☎ 〇四四―九五―一―三〇〇

印刷 (株)エリアブレイン